白梅学園大学・短期大学図書館報

花みづき

第30号／2016.4.1
白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL042-346-5626

愛読書はドライサー

白梅学園大学・短期大学図書館 館長
子ども学部 子ども学科 教授　中島 好伸

「私の専門はアメリカ文学です」と言う時の受けはいいが、「自然主義、セオドア・ドライサーを好んで読んでいます」と付け加えると、それ古くないですかという微かな素振りを感じることがある。しかも自然主義って、フランスのエミール・ゾラ経由の環境決定論でしょう。人間に自由意思がないなんていま流行りませんよ、と叩きつけられるような視線を感じる。黒人のアリス・ウォーカーとか白人のトマス・ピンチョン、最近亡くなったサリンジャーとか面白い作家いっぱいいるでしょう。どうして今さらドライサーなんですか。

これに対する答えはなかなか難しい。初めからドライサーを専門にやっていこうと思っていたわけではない。大学時代の授業で薦められて、上巻下巻合わせて1400頁もある新潮文庫の『アメリカの悲劇』を手に入れたのが始まりだった。1週間でこれを読み上げた時には何かその魅力に嵌(はま)ったような気がした。次第に社会に巻き込まれていく主人公クライド。動き始めた歯車は留めることができず、予想もしなかった結末を招く。どこで間違ったのか。どうやったら間違いに気づくのか。人生を真正面から受け止めるそのドライサーの姿に何か学ぶべきものを感じた。これは本物だと。

当時英文科に在学していた私は早速『アメリカの悲劇』の原文を手に入れた。もちろんすらすらなど読めるはずもなく、辞書を引き引き苦労して全巻を読破した。その時の気分は爽快だった。『アメリカの悲劇』よりも長いアメリカ文学は『風と共に去りぬ』くらいだろう。私はアメリカ文学の大物を読破したぞという気分になって、アメリカ人にまでHave you ever read *An American Tragedy*? と奢った質問をしたものだ。

ドライサーの作品は長編が8編。短編その他雑文を含めると全巻で20巻あり、大学院の時には妻に相談して数十万円もする全集を買う許可を得た。手軽に手に入る翻訳は『アメリカの悲劇』のほか『シスター・キャリー』という一編があるばかり。こうなったら、彼女の手前もあり読むしかない。全集の英語をこつこつと読む毎日がしばらく続いた。

2000年度に白梅学園から長期研修を頂き、アメリカで一年を過ごす。もちろんこのときの研究テーマはドライサーの足跡をたどること。オハイオ州のケントという大学町にアパートを借り、大学からは図書館の一角にcarrelと呼ばれる個室を与えてもらい、日本ではできないドライサーの素顔を求め漁った。このKent State Universityにはドライサー研究の第一人者がいた。また、車で一日走ればドライサーが生まれた所や『アメリカの悲劇』のモデルとなった事件の舞台アディロンダックのビッグ・ムース湖まで行くことができる。

『アメリカの悲劇』モデルの舞台 ビッグ・ムース湖

ドライサーが生まれたインディアナ州のテレホートでは、自伝にあった生地の住所Ninth Chestnutを割りだし、彼の痕跡を求めた。彼は10人兄弟の下から2番目で、長兄にはインディアナ州の州歌を作曲したポールもいる。彼ら兄弟を記念してウォーバッシュ川にはハの字に掛かった橋にポール橋、セオドア橋の名がついていた。地元の人が、「あの兄弟は永遠に交わらないのよ。一方通行だから」と言っていたのが印象に残った。また『アメリカの悲劇』の舞台となったニューヨーク州ハーキマーには、主人公のモデルとなった男が入れられた監獄が残っており、その中にも入って主人公の想いを想像してみたりもした。

ドライサーの兄ポールが生まれた家

自分の興味関心から読書の幅は広がっていった。今ではドライサーに関わることなら法学から生物学まで読み漁る。アメリカ文学ではあまり人気のない作家かもしれないが、読んで面白い、読み応えのある作家なのだ。私は相変わらずドライサーを読んでいく。なぜなら、彼が私の専門であり、彼の小説が私の愛読書だからである。皆さんにもお薦めしたい。

本との出会い方

子ども学部　発達臨床学科 准教授
廣澤　満之

子どもが本に親しむかどうかは環境かもしれない。祖父母は本を大切にする人で、家には私のおじさんやおばさん、父が小さい頃に読んだであろう本がたくさん置いてあった。埃をかぶり黒くなり、表紙をめくると紙魚（しみ）が這う本をパタパタとはたいてから自分の部屋に持っていくことが大人の証だった。おかげで三島由紀夫、野間宏、高橋和巳といった作家が活躍した時代以降の本は読んだ記憶がない。

小学校 4 年生の時に一冊の本と出会った。吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』である。主人公のコペル君（小学生）がおじさんとの文通を通して、成長していく物語だ。そこには、思索の楽しさ、社会とは何かといったテーマが書かれていた。その中で心に残っているのは、「あぶらげ」というあだ名をクラスの子どもたちにつけられ（彼の家は豆腐屋だった）、いじめられている子どもの話である。遠巻きに彼を見ていたコペル君が彼の家を訪れ、彼が家の仕事をしている姿を見た。何気なく食べている油揚げはどのようにして作られているのかという発見をするのである。そして、学校ではぱっとしない彼が豆腐を揚げる時には、さっと手を動かし、まさに職人のように振る舞っていたのである。このことをきっかけに彼と親しくなるのだが、コペル君は結局いじめに対して声を上げることはできなかったのである。

当時は、言葉にできなかっただろうが、この本で学んだことは人間の多面性と多様性、社会に存在する不条理であった。自分に影響を与えた本をもう一冊挙げるならば、部落差別をテーマとした島崎藤村の『破戒』だろう。薄暗い本棚から島崎藤村を選び、読んでいったのを覚えているが、残念ながら『夜明け前』などは記憶に残っていない。

大学生になり、時間と行動の自由（とお金の不自由）を手にして、障がいをもつ子ども、セクシャル・マイノリティの友人たち、街中のホームレスのおじさん、日本で暮らす外国人など多様な人との出会いがあった。結局、大学の教員として支援とは何かを語る時には、当事者の多面性や支援者自体の多様性といった『君たちはどう生きるか』で学んだことばかり言っている。本との出会いが仕事につながっているかもしれないが、成長していないようだ。3 月に引っ越しを控え、妻と話していることがある。娘にとってはまだ難しいかもしれないが、とにかく本を家に並べておこうということである。

境遇を選ぶことはできないが、生き方を選ぶことはできる

発達臨床学科 4 年
芳賀　馨

学校法人ノートルダム清心学園理事長である渡辺和子さんの本に『置かれた場所で咲きなさい』がある。その中には以下の言葉がある。

> Bloom where God has planted you.
> (神が植えたところで咲きなさい)
>
> 「咲くということは、仕方がないと諦めるのではなく、笑顔で生き、周囲の人々も幸せにすることなのです」と続いた詩は、「置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです」と告げるものでした。

私たちは「こんなはずではなかった」「自分はここではない別の場所でもっと用いられる人間である」と考え、現在の状況に不満を持つことが多くある。しかしこの本では、自分が今置かれている場所こそが、自分の居るべき場所なのだと告げている。

砂漠の中のサボテンが鮮やかな花をつけているのを見たことがある。そこを誰一人として通らなかったならば、その花は見られることがない。しかし通る人がいた時には、荒涼とした景色の中でのオアシスとなる。サボテンの立場としては「見られるために咲く」のではなく「生きるために咲く」のであろう。人間に見られるかどうかに関係なく、全力で咲いているのである。そうだとすると、私たちも周囲の人にどう見られるかを考えるのではなく、今この場所で自分を精一杯生きることがまず大事なのだろう。

同じ本の中には「どうしても咲けない時もありま

図書館の恩恵とは

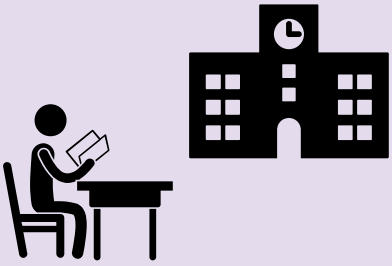
2016年3月子ども学研究科 修士課程修了生
渡邉　志津子

この２年間に受講した数々の講義は、どれも興味深く目から鱗の連続でした。その内容を深め、研究生活を支えるかけがえのない場所となったのが白梅学園大学・短期大学図書館です。

各地に図書館が整備された日本ですが、世界に目を転じると、図書館の存在を知らず、書物を手にするのが困難な人々もいます。幼稚園教諭として ２年間滞在した中米のある国では、平均的な生活水準とされる人々の人生にとって、書物は無縁のようでした。様々な事情で必ず行けるとは限らない小学校において、運がよければ、授業時間内だけ､「教科書」が貸与されるといった状況でした。

一概に図書館の恩恵を評することはできませんが、その恩恵を被る人とそうではない人がいることは確かです。教育哲学者 J. デューイは、「書物は経験の代用物としては有害なものであるが、経験を解釈したり拡充したりするうえでは、このうえなく貴重なものである」[1] とし、図書館は、「世界の叡智の集積」[2] であるとしました。デューイは、学校と社会生活を結合してゆくイメージを、「概念図」[3] にしていますが、それによれば、学びは、図書館から学校外へ、また、学校外から図書館へ取りこまれると解釈できます。著者から渾身のメッセージを受け取れる、確かな機会が保障された図書館の恩恵は、図書館の利用者が自らの経験を書物により解釈し、拡充し、それを社会で実践し、検証し、還元することによって、すべての人に享受されるのかもしれません。

修士課程を修了しましたが、本当の研究はこれからです。あの地に生きる人々のことを思いつつ、今いる場所で自身ができることに精一杯取り組もうと思います。



1 ジョン・デューイ著、市村尚久訳（1998）
『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社 p.146
2 デューイ著、宮原誠一訳(1957)『学校と社会』岩波書店 p.101
3 同上書 p.96

す。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へと降ろして、根を張るのです。次に咲く花が、より大きく、美しいものとなるために。」と書かれている。根の話では白梅学園大学に入学して間もないころ、金子尚弘先生※から「木を植えかえる時には、その根を広げなさい。そのひと手間が、その後の成長の違いとなる。」という話があったことを覚えている。

大学で学ぶ私たちは将来のために必要な栄養をためて根を張っている時期を過ごしているのかも知れない。いつか自分なりの花を大きく咲かせるために。

※ 現 白梅学園大学名誉教授
（2015年３月まで子ども学部教授として在籍。）

図書館からのお知らせ

図書館ホームページに新しい機能が追加されました。（2015年８月）
http://libwww.shiraume.ac.jp/

●利用状況照会・貸出延長
自分が借りている資料の確認、貸出延長ができます。
画面左上「利用状況照会」から、学籍番号・パスワード（初期は生年月日８桁・学生の場合）を入力してログインしてください。

●オンライン予約
現在貸出中の資料に対して、オンラインで予約ができます。
検索結果一覧画面で表示される「予約」ボタンを押して、予約してください（ログイン方法は利用状況照会と同様）。

絵本1万冊所蔵を記念して

白梅学園大学・短期大学図書館　職員
武田 和彦

白梅学園大学・短期大学図書館は、1957年の白梅学園短期大学設立と同時に「白梅学園短期大学図書館」として開設。2005年の白梅学園大学設立に伴い現名称に変更し、今年で60年目になります。これまでに所蔵した図書は17万冊以上に及び、なかでも絵本は他の大学図書館に比べて多く、2015年に１万冊[1]を超えました。本学では授業や実習関係で絵本が利用されることは多いですが、実際どのような傾向にあるか見ていきたいと思います。

1994～2015年までの絵本の貸出累計回数ベスト10を作成しました。図書館システム導入後のこの22年間で一番多く借りられた絵本は、『はらぺこあおむし』で340回。１年間では約15回借りられた計算になります。その後、『おおきなかぶ』319回、『わたしのワンピース』281回と続きます。ランキングにはロングセラーとして長年親しまれているタイトルが多いのが特徴です。また、ランク外ですがここ数年だけでは、『どうぞのいす』が常に上位です。親しみやすい絵やテンポのよさだけでなく、相手を思いやる心など考えさせる内容の絵本も人気のようです。

本学の場合、実習利用の関係で子ども（主に幼児）に読み聞かせしやすいタイトルが借りられやすい傾向にあります。一方で、絵本は年間1,000冊ほど出版され[2]、白梅学園大学・短期大学図書館でも実習利用の絵本だけでなく幅広いテーマを収集しています。例えば、『いのちつぐ「みとりびと」シリーズ』（農文協）は、学生が死や看取りを考えるきっかけになる絵本です。

2010年８月に絵本の配架を、タイトルをローマ字読みする方法からカタカナ読みへと変更しました。これにより絵本書架が50音順となり、利用者が探しやすくなりました。

白梅学園大学・短期大学図書館の長い歴史の中で絵本１万冊はあくまで通過点ですが、これからも利用者にとってより役に立ち、使いやすい図書館になるよう職員一同、日々努力してまいります。

絵本貸出累計回数ベスト10（1994～2015）

順 位	回 数	書　名
1 位	340回	はらぺこあおむし
2 位	319回	おおきなかぶ　ロシア民話
3 位	281回	わたしのワンピース
4 位	238回	てぶくろ　ウクライナ民話
5 位	205回	ぐりとぐら
6 位	197回	ぐるんぱのようちえん
7 位	180回	おふろだいすき
8 位	146回	そらいろのたね
9 位	137回	かいじゅうたちのいるところ
10 位	134回	三びきのやぎのがらがらどん

1 2015年12月31日現在で10,116冊（和絵本 9,441冊、洋絵本 327冊、大型絵本 90冊、しかけ・特殊絵本 234冊、特大絵本 24冊）。研究室置きは含まず。
2 教文館子どもの本のみせナルニア国編『2013年に出た子どもの本』（教文館 2014）

●●●図書貸出ベスト 10●●●
（2015／1／1～2015／12／31）

順 位	回 数	書　名
1 位	48 回	どうぞのいす
2 位	21 回	施設で育った子どもたちの語り
2 位	21 回	ぼく、アスペルガーかもしれない。
2 位	21 回	子どもが語る施設の暮らし 2
2 位	21 回	おおきなかぶ　ロシア民話
6 位	19 回	跳びはねる思考　会話のできない自閉症の僕が考えていること
7 位	17 回	たんぽぽのうたがきこえる
8 位	16 回	幼児の体育 新版
8 位	16 回	子どもの貧困［1］岩波新書
10位	15 回	虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える援助

絵本「どうぞのいす」が48回と、昨年（20回）の倍以上の貸出がありました。また、2013年4月から始まった小学校教員養成課程推薦書「目指そう100冊読書」が多くランクインしています。

●●●ビデオ・DVD 閲覧ベスト 10●●●
（2015／1／1～2015／12／31）

順 位	回 数	書　名
1 位	71 回	リトル・マーメイド
2 位	62 回	塔の上のラプンツェル
3 位	53 回	アラジン
4 位	47 回	（持ち込み資料）
5 位	43 回	美女と野獣
5 位	43 回	ハチミツとクローバー
7 位	40 回	ホーム・アローン［1］
8 位	39 回	アナと雪の女王
9 位	37 回	アリスインワンダーランド
10 位	36 回	着信アリ Final

昨年同様、「リトル・マーメイド」などディズニー作品が人気でした。（持ち込み資料）は、授業指定のものや調査研究のために限り、図書館内で視聴できます。ぜひご利用ください。

花みづきについてのご意見・ご感想を図書館までお寄せ下さい。E-mail：library@shiraume.ac.jp